
裏・機動六課～ロングアーチ業務録～

煤払

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏・機動六課〜ロングアーチ業務録〜

【Nコード】

N9418M

【作者名】

煤払

【あらすじ】

聖王教会騎士、アレル・ロックヴェルト。

彼が向かうは起動六課。果たして彼はJS事件にどう関わるのか！
というか見えるところで関われるのか！

裏・機動六課

〜ロングアーチ業務録〜

ミッドの空に、テイク・オフ！

こんな感じで、俺は仕事に行きました。（前書き）

ノリでる。

すみません、いきなり噛んでしまうほど完全にノリで書きました。

この小説のテーマは『シャツハさん』です。

もつと言うと『シャツハ萌』です。

もし煤払が書いた、シャツハさんについて書かれた感想を見た方がいらつしゃったら、『あ、コイツやつちやつたんだ…』とでも思つて下さい。

ラモンさんの『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常』の番外編に書かれたシャツハさんに萌えました。萌えたんです。だから書きました。すなわちヒロインはシャツハさんです。

ラモンさんの小説はとても面白いので、ぜひご一読を！

私はここで、声を大にして言いたい。

シャツハさんは萌えキャラであると……！！

ジーク・シャツハです。いや失礼、取り乱しました。

そんなこんなで始めたこの小説。煤払のキャパ次第では、大分更新が遅れるかもしれません。

それでは、シャツハ萌…じゃなかった、裏・機動六課…ロングアイチ業務録。お楽しみいただけると幸いです。

こんな感じで、俺は仕事に行きました。

「最近、貴方の羽振りが随分と良くなっています。調べてみると貴方宛に”献金”として預けられたものが、教会本部に送られた記録がないのですよ」

目の前の男 聖王教会の騎士の一人に、私は声を掛ける。

「聞けば貴方は、『聖王を現代に蘇らせる』などと触れ回っていたとか。そちらも我々の耳に入っておりません。よろしければ、お聞かせ願いたいのですが」

禿げ上がった頭部から弛んだ首まで……と、いけません、言葉遣いが崩れて来ました。

まあ、顔中に冷汗をかいてることから、大体このあとの処遇は察しているでしょう。

「わ、私は聖王を蘇らせる！あれは私の同志から受け取った、その為の資金だ！」

何やら弁解するように言いますが、それを自分で使っちゃ駄目ですよ。理屈が通っていないことに気付かないんですかね。呆れてものも言えません。

私の沈黙が先を促していると思ったのか、彼は続けて話し出します。いや、だからただ呆れてただけなんですが。

「私の言っていることは決して戯言などではないぞ！私に任せておけば必ず聖王は蘇る！今、私の手には聖王の遺伝子があるのだから

な！」

その言葉に、私は少し、眉を上げる。

聖王。古代ベルカに生きた三人の優れた『王』の石柱にして古の大戦を終幕へと導いた英傑。

その、” 遺伝子 ” がこの男の手に……？

「……」人間” のクローニングは、管理局によって禁じられているはずですが」

「それがなんだというのだ！？ かの『聖王』の再臨だぞ！？ 聖王陛下が今、この時代に復活し、再びこの世界を治めるのだ！ 我々がお育てした！ 我々の聖王が！」

” 我々の ” 聖王。

なるほど、そして現代の聖王の教育役、はては摂政の地位にでも収まり権力を得ると、そういうことですか。

……胸糞悪い話だ。

ああ、胸糞悪い話だよ。

「わかっただろう？ わかったらすぐに私を解放しろ。そして今回の事も忘れる。そうすれば」

「少し黙れ、おっさん」

「キサマ！？ この私に向かってその口の聞き方はなんだ！ 我々は聖王教会に属する者として聖王を復活させる使命があると、何故わからん！！」

言葉遣いになんて、もう気は配らない。

結局、こいつはあいつと同じような存在を作り出そうとしている。

「ごめんなさい、お兄さん。あと、ありがとうございました。」

勝手な都合で作りに出されて、不要になると簡単に捨てられる、あいつみたいな奴を！

「関係ねえし、興味もねえな、そんなもん」

「なんだと！？ キサマ、自分の言ったことを後悔しろ！ ここを出たらすぐにでもキサマを除名してやるぞ！ 私の力ならキサマのようなウグツ！？」

「黙れっていったのが、わからねえか？」

前の質問だけど、覚えてます？ 今、答えます。

「カリムか？ 横領…… っては言えないかもしれねえが、使ったのは認めたぞ」

「認めたって、貴方は何をやっているの！？」

「騎士アレル、理事から手を話さない！ それにその言葉遣いは直しなさいと何度も！」

「カリム、シャツハも、うるせえ。いいから騎士を何人か揃えろ。そこでこのクソツタレの家やら借りてる金庫やらを徹底的に調べろ」

僕自身がしたい事。…… お兄さんの生まれたところ、見てみたかった。きれいなところなんですよね？

「一体どういう」

「“聖王の遺伝子”とやらを手に入れたらしい。それを使って聖王を蘇らせる気なんだとよ」

「なんですって！？ それは……」

「マジだ。なんなら会話記録を送る」

『いえ、結構よ。すぐに手配するわ。シャツハ』

『はい、騎士カリム。要請を出して参ります』

だから、ぼくが したら

「ゲ、ゲホッ！キサマ、私の首を絞めるなど………！」

「……少し待ってる。次はテメエの手に縄絞めてやる」

連れて行って、くれますか……？

数時間後、その男の家へ騎士団が到着した時には、家は荒らされ”
遺伝子”が保管されていたと思われる金庫には

”同志”達から受け取った金だけが、踏み荒らされ蹴散らされ、
無惨な姿で残っていた。

「機動六課？」

「ええ、そうよ。八神はやてって知ってるでしょう？ あの子が局
で新しい部隊を作るらしいのよ」

八神はやて八神はやて……。ああ、カリムとロツサのやつの妹分か。

「ロストロギア『レリック』。その探索が主な任務よ。そこに、貴
方に行ってもらいたい」

ロストロギア『レリック』。

四年程前に発見され、かのジュエルシードのように複数あることが確認された、古代の遺物。

「待て、確かあれにやガジェットとかいう変な機械どもが群がって来るんだろ。それに対抗しろってか？ 切った張ったはめんどいから御免だぞ」

「いえ、貴方には事務の方にまわってもらいたいの」

事務。事務ねえ。

俺みたいな教会騎士にも色んなタイプがいる。俺なんかの戦闘が得意な奴、カリムみたいな基本的に戦闘しない奴、シャツハみたいな秘書と護衛を兼ねた奴なんかも、少し珍しいが、いることにはいる。でで、別に俺は事務も出来るが、基本は戦闘職だぞ。

「六課はね、新人が多いのよ。みんな未来のエリートって言われるくらいに優秀な人達ばかりなんだけれど、やっぱり新人は新人。少し年上で経験のある人が欲しいのよ」

「局員から出すわけにやいかねえのか？ いくらお前の妹分の隊だからって、なんでまた教会から」

いい年してあごに人差し指あてながら首を傾げるのをヤメ口。元々童顔なもんで違和感無いんだから。そのせいで騎士やら理事官やらの癖に威厳もギリギリなんだから。

「えっとね、私が後見人の一人なの。だから、教会からも一応お目付け役というか、経過確認役というか」

成る程、そこはわかった。なら俺に白羽の矢がたった理由は？

「貴方、嘱託資格持つてるじゃない？それでなのよ」

そっぴや持つてたな。使わんから忘れてた。
ずつと更新してねえな。後で確認しとこつ。

「わかりましたよつと。いつ頃発てばいい？」

「隊舎に部屋は借りてあるから、一週間後くらいかしら。急な話で
ごめんなさい」

「別に構いやしねえよ。んじゃ、早速準備してくるわ」

「ええ、お願いね」

「それじゃサーレ、はやてのことよろしくね」

さて、なんやかんやで一週間が過ぎ、今俺達は教会前にいるわけだが。

「いつの間にお守りまで仕事に入つてやがる」

「サーレ！ですから貴方は言葉遣いに気をつけなさいと言っている
でしょう！……結局出向前までには直せませんでした、六課の皆
さんにご迷惑をかけないように。忘れ物ありませんね？」

「忘れ物つてわかつてる時点で忘れ物じゃねーつつの」

「また貴方は人の揚げ足を取つて！」

いつも通りのやり取りをシャッハとしていゝと、隣でカリムが笑つてやがる。

「なんだよ？」

「いいえ、二人とも、いつも仲がいいなと思つて」

俺はシャツハと顔を見合わせる。

俺がコイツと仲がいい？冗談、ガキの頃からの腐れ縁だろ。

「んじゃま、そろそろ行くわ。二人ともせーぜー元気だな」

「はい、いつてらっしゃい」

「くれぐれも六課の皆さんにご迷惑をかけないように。そのような話が私の耳に入ったら……、ヴィンデルシャフトが唸りますよ」

このデンジャラス修道女め。お前は本当に神職者か。

「信仰心に乏しい貴方には言われたくないですね。第一、貴方は騎士としての自覚が」

「んじゃそろそろ行くな！」

そう言い残して俺はダツシュ。

振り返ってはいけない。ヴィンデルシャフトがセツトアップされた気配があるのだから……。

って足はやっ！

こら、追ってくるなシャツハ！

こんな感じで、俺は仕事に行きました。（後書き）

六課行ったらシャッハさん出ないかという疑問。

「ずいぶん急ぎ足だな、今回は。ところで部隊長、出張だった？ お土産よろし

大分間を開けての投稿です。お待たせして申し訳ありませんでした！

文化祭の準備に追われ、祭りが終わったら入試準備に追われ…書き
たいシーンだけ浮かんで、書く時間がなかなか…（T・T）

「ずいぶん急ぎ足だな、今回は。ところで部隊長、出張だった？」

お土産よろし

「すみませんね、アレルさん。いつも手伝っていただいて」

「別にいいさ。ロングアーチの連中はできるやつばかりだしな。」

そっちが立て込んでなきゃ手伝いぐらいしてやるよ、シャーリー」

只今、六課のデバイスルーム。

俺はそこで新人どもの新デバイス製作の手伝いをしている。高性能の最新型、製作費用は部隊持ちってんだから羨ましい限りだぜ。実は六課に来てから事務仕事よりこっちに回されることが多い。

いや、部隊長の許可あるからいいがよ。

「そろそろ訓練も本格化してきますし、なるべく早くこの子達を完成させたいんですけどねえ」

そう言っただけでシャーリーが眺めるのはデバイス達が浮かんでいるポット。中には四つのデバイスが入っている。

「スバルとティアナ、だったよな。あいつらはデバイス自作だったか」

「そーなんですよ。訓練はほぼ毎日ですし、多分ガタがくるころじゃないかと」

朝から晩まで訓練三昧だからな。よくやるわ。

俺が昔シャッハに付き合わされた時は二日で投げ出した。三日目に午前の訓練サボったら、昼に部屋の前に半泣きで立っててビビったわ。……今やったらセットアップして追い回されるな。

と、ビル、ここのプログラム走らせてみてくれ。

《Running》

「こんにちわです。シャーリー、一緒にお昼にするですよー」

「あ、リイン曹長!」

「はいですう! あ、アレルさんもいたですか」

「おう、ちっさいの。そーいやそんな時間だな」

入って来たのは六課の空飛ぶマスコットことリインフォース? 空曹長。部隊長んとこの末っ子だそうだ。

「二人はデバイス達の調整ですか?」

「はい」

「そろそろ完成するです?」

「マツハキヤリバーがちょっと手こずってます。スバルのオリジナル魔法のウイングロード。あれをこの子からも発動できるようにしたいんですが……」

「ありや完全に先天性の魔法だからな。術式も普通のとかなり違ってめんどいんだよ」

ちなみにビル、俺のデバイス、ヴィンセントに試させてるのがそのウイングロード用のプログラムだったりする。

「でもその分、やり甲斐がある……ですよね?」

「う」名答!」

カッタカタとキーを叩いてたら、リインが腕を広げてデバイス達を激励し始めた。まだ目覚めちゃいないが応えてくれると、多少なりとも製作に関わってる身としちゃ嬉しいね。

《Master!》

どした？ ってプログラムが暴走しとる！？

「な、なにごとですかぁ！？」

「ウイングロードが部屋中に……ってダメー！ そっちの端末機には行かないでー！！」

ビル、キャンセルは……。

《現在バグを直していますが……三分間ほど、なんとかして下さい》
はぁ、昼飯は遠そうだ……。

で、その数日後。

案の定自作組のデバイスがぶっ壊れた。ちょうどいいんで新しいのを渡したらしい。

ん？ なんで伝聞かって？ そりやお前、完成したから俺は事務仕事に戻ってたのよ。

でだ、デスクで書類作ってたところに、緊急アラームが鳴り響いた。あぁ、ついにか……。

事務仕事のはずが、通信士資格やらがあつたせいで、いつの間に司令室入りさせられてた。……カリムの差し金か？

「アレル・ロックヴェルトだ。入るぞ」

いや、カリムだな。もつと言えばシャツハもだ。嘱託資格もカードに記載されてた資格も奴らに言われて取った覚えがある。

「アレルさん、こちらへ！」

「おうよ。グリフィス、目標は？」

目の前にモニタが展開される。そこに映るのは、崖壁を走るモノレール。

「このモノレールでレリックが輸送されています。車内は無人ですが、すでに多数のガジェットが侵入、管制をジャックしています」

「なるほどな。部隊長は？」

「聖王教会からこっちへ向かっていらっしやるはずです」

カリムんとか……。

ま、こっちはこっちでお仕事しますか。

とりあえず席についてモニターを……。

「ん？ アルト、広域スキャン！ 空になんか影が横切ったぞ！」

「はいっ！ ……ガジェット反応、空からです！」

「航空型、現地観測隊を補足！」

オイオイ新型か！？

つかマズイな。先になんとかしなきゃヘリがやばいぞ。

『こちらフェイト。グリフィス、パーキングに車止めて向かうから、飛行許可お願い』

「了解。市街地個人飛行、承認します！」

アレルさん、高町空尉の方にも」

「あいよ。……聞こえてたか？ 高町空尉、そっちも先行して航空型に対処を。ヴァイス、こっちから送るルートに沿ってくれ」

『わかりました！』

『了解でさあ！』

齧

「スターズ01、ライトニング01、制空権獲得」

「ガジェット？型、散開開始！ 追撃サポートに入ります！」

キーボードを叩いて？型の編隊をロック。それらに追尾設定を掛けたうえで隊長らに送る。

つたく、四方八方から湧いてきやがるな！コイツらは！

そんなこんなで今回のオチ。

結局たいしたトラブルもなく任務完了。アンノウンが出たが部隊長の知り合いらしい。

らしいつつつか、俺の知り合い、サーレ・ローラルバーク・ナカジマだ。

なに、あいつも来んの？知り合いだらけだな、この部隊。
で。

あの任務から数日後。ロストロギア反応が出たとかで部隊長をはじめめとしたフォワード陣が管理外世界の97番だかに出張。
教会の方からの依頼らしい。

その間大部分のロングアーチは隊舎で待機。出張中にガジェットが出たらどうすんだ……？

「それで？ お前さんは居残りで六課の警護か？」

「うむ。これから皆が出払う場合も我はここを守ることになるだろう」

「『盾の守護獣』だしな、適役っちゃ適役か。しかも狼形態だと人材制限にも引つ掛からないと。リミッターほどじゃないがお前も裏技だよな」

うお、銀取られた。

んじゃここに角打って成る、と。パチリ。

「我らは主の保有戦力扱いであつたからな、そこを突いて我らだけ制限から抜け出そうとも考えたのだが……」

「流石にそりゃ無茶過ぎるだろ……」

こいつの櫓、崩せねえなあ……。こつちに関しても流石は守護獣だよ、オイ。パチリ。

「うむ。しかしよく将棋など知っていたな。ミッドチルダにいくら地球の、特に日本の文化が普及しているとはいえ異界の伝統遊技など競技人口も少ないだろうに」

なんでも第97管理外世界、『地球』からの次元漂流者が昔から多かったらしい。そういう奴らから向こうの文化が入ってきたわけだ。向こうじゃ次元漂流は神隠しと言われるらしい。たまに家畜も流れてくるが、そっちはキャトルキューミレーションだったか？
パチリ。

「はやてが教会に来たとき土産に持ってきたんだよ。騎士団の指揮官クラスは皆やってるぜ？」

たしかチェスとかいうのも持ってきてたな。たまに将棋vsチェスなんてのもやる。これもはやての案だったんだが、そういうのは

「ワヨーセツチュー、とか言ったか？」

「むしろ異種格闘技戦、といった感じではあるな。……アレル、王手だ」

「なにい！？ ま、待ったは……？」

「すでに三回、使っているだろう」

「うっ……。ごめんなさい、参りました」

ただいま午前十時。このままにもなしに、部隊長たちが帰ってくるとうれしいんだがなあ。

「ずいぶん急ぎ足だな、今回は。ところで部隊長、出張だった？ お土産よろし

ここを読んでいるということは、今回の話を読んでいたいたとい
うことで。

お気づきだとは思いますが、この「裏・機動六課」ロングアーチ業
務録」は「魔法少女リリカルなのはStrikers」曇り空と
優しい雷」の外伝的な物になっています。

というか、します。しました。してしまった！

基本的に本編の話と話の間の出来事や、本編の裏側などを書いてい
こうと思います。

とか言って本編より時間進んでるんですけどね！

こっちに追いつけるよう、本編の方も頑張ります…。

ではでは、御意見・御感想など、お待ちしております。煤払でした。

え？ シャツ八さんが出ていない？
次回です、次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9418m/>

裏・機動六課～ロングアーチ業務録～

2010年10月13日05時50分発行